

宮沢賢治の初恋と短歌

—不可解な歌をめぐって—

はじめに

宮沢賢治の初恋をめぐる短歌には、奇妙で不思議と言うしかないような短歌が少なくないが、そんな中には不気味であり醜悪であるといった、おおよそ恋や愛とは結びつけないように思われるものもある。たとえば次のような歌である。

105 つ、ましく午餐の鰯を装へるはたしかに蛇の青き皮なり

110 さかなの腹のごとく青白く波うつ細腕は赤酒を塗ればよろ
しかるらん

(ともに「歌稿〔A〕」最終形態)

池川敬司

賢治は盛岡中学卒業の直後(大正三年四月)、鼻の病で岩手病院に入院しているが、そこで出会った看護婦に初恋をするのである。退院するまで病熱に苦しみ、また進学について父との確執に悩みながら、また恋に身を焦がす日々を送るのであるが、日録のように賢治は、一首／＼の短歌にそれを込めているのである。冒頭に掲出した「歌稿〔A〕」、それにもとづいて編集された「歌稿〔B〕」はともに賢治の短歌集と言っているものである。詳細は後述するが、簡単に触れておけば、「歌稿〔A〕」は妹達と賢治が、そして「歌稿〔B〕」は「歌稿〔A〕」にもとづいて、賢治自身が編んだものである。それを校本全集に収録するに際して、「歌稿〔A〕」「歌稿〔B〕」と呼称し、またその内容が対応するものには共通の歌番号が付けられている。

初恋をめぐる歌は退院後も続くのであるが、その一連の短歌

(群)は、一まとまりとして八十番歌から一八五番歌までと、一応区切って見ることが出来る。その意味で一〇五、一一〇番歌は、まさに初恋の渦中であって作られた歌と言つていいものである。その奇妙さ不気味さ、見方を変えればユーモア(ブルックユーモア)は、病床にあったことにもよろうが、また半ば以上は初恋の熱情のせいでもあると、ひとまず言っておきたい。本稿では、「歌稿〔A〕」「歌稿〔B〕」での主に二首の短歌の掲出の仕方を問題にしつつ、またその短歌の読みの可能性を探つてみたいと考えている。

1

さて初恋をめぐる短歌について、すでに稿者は「宮沢賢治の初恋と創作―短歌・文語詩を中心に―」^{注(1)}を書いているが、初恋が入院中であつたこともあり、病とも関連付けながらも、初恋と短歌を中心とした論述におもきを置いて、その有り様を考察した。本稿はそれ(以下、前稿という)を踏まえた上での考察ということになる。

賢治はこの時のことを晩年、「恋のはじめのおとなひは／かの青春に來りけり」(文語詩未定稿「機会」の一節)と書き記し

ているが、看護に当たった一人の人に熱烈な恋をするのである。すでに触れたように、この入院は鼻の病でのものだったにもかかわらず、こともあろうにチブス菌に感染し、その病熱に苦しむことにもなる。そうした病熱のせいと思われる短歌として、「歌稿〔A〕」八三番歌「白樺の老樹の上に眉白きをきな住みつゝ、熱しりぞきぬ」という歌がある。また前稿で「救焦げの月の歌群」と呼称した、何度となく襲つた病熱の、その原因(病名「チブス」)が判明しないことによる不安や焦燥・危惧から、不眠に苦しむ中であつて歌つた短歌群の一首、これも「歌稿〔A〕」九四番歌「ちばしれるゆみはりの月わが窓にまよなかきたりて口をゆがむる」などがある。

初恋に関する短歌は、例えば一二二番歌「すこやかにうるはしき友よ病みはて、わが眼は黄なり狐に似ずや」(「歌稿〔A〕」)のような、恋に恋するような状況の歌は少なく、退院後のものを含め、むしろ恋に焦がれる熱情によつて、一種異様であつたり心穏やかでない歌が多いのである。そこには危機感、失意、不気味さ、不可解さなどと言つた、恋に苦しみ懊惱し葛藤し、苦渋に満ちた内面を吐露する、精神的にも肉体的にも不安定な状況下にある自らを対象化した歌が並ぶのである。以下は全て「歌稿〔A〕」によるが、たとえば次のような歌である。

131 岩つばめわれ（――）につどひてなくらんか大岩壁の底に
墮ちなば

134 わがあたまととききわれにきちがひのつめたき天を見する
ことあり

160 そらに居て緑のほのほかなしむと地球の人のしるやしらず
や（以上、いずれも最終形態）

166 目は紅く関折つま多き動物が藻のごとくむれて脳をはねあるく
（第一形態）

恋の熱情に侵された者の、精神的不安定な状況下にあつたことによる幻覚や錯覚、あるいは不確かな気分のもとで歌われたものだとすれば領ける歌だが、賢治の初恋に関わる短歌はそうした歌が多く、ここではその一部数首を引用した。一三一番歌は、求めて求め得られない恋に失望し自暴自棄になり、思わず口を出た自己抹殺（自殺願望）の歌であり、一三四番歌も、失意の直中にあつてその存在の不確かさ（希薄）を歌つたものであり、一五九番歌に至っては、存在の希薄さが宇宙感覚（幻覚）となつて歌われたものである。また一六六番歌は、脳の異化という感覚の異常さを示す歌であり、類歌として一六二番歌「なにの為に物を食ふらんそらは熱病馬はほふられわれは脳病」や、一六七番歌「物はみなさかだちをせよそらはかく曇

りてわれの脳はいためる」と言つたものがある。

こうした短歌は、恋や愛とは一見相容れないもののようにだが、初恋をめぐる賢治の短歌の全体を見渡した時、むしろその恋への激情や求めて求め得られない精神的痛手が、そうした「狂」的なものを生み出しているとも言えるのである。つまり良くも悪くも賢治の初恋は、そうしたものを全て抱え込むものとして、推移し成立しているということになる。そうした範疇に入る歌の典型と云つていいのが、冒頭に掲出した一〇五番歌や一一〇番歌であり、またその類歌である。

すでに前稿において賢治の初恋の経緯について触れたが、ここでは初めから相手との意志疎通を欠き、欠く故に相手の心が見えず、見えない故に苦しむという心の循環があり、求めて求め得られないプラトニックな恋であつたことを明らかにしている。プラトニックな恋の始末の悪さは、始まりがあつて終わりがなく、ないことである。もし終わりがあるとすれば、それは始末の悪さに苦しみ、その苦しみから逃れるために強引に終わったと自分に言い聞かせる（強引に蓋をする）からである。恋の成就がないばかりか、自分が苦しみがいて求めることの、それを打ち消すであろう相手の拒絶という、直接的な恋の痛手のないプラトニックな恋は、その意味で終わりがないのであり、終われ

ないのである。むしろ美しい記憶だけではない初恋の、求めて求め得られない懊悩の痕跡は、どろどろとしたカオス（混沌）として、いつまでも残り続けるのである。初恋としてのプラトニックな恋は終わったとしても、その心に残した痕跡は、薄れることはあっても恐らくその存在の終焉まで決して消えることはないのである。

初恋をめぐる賢治の短歌が、恋することあるいは恋そのものを歌う歌が少なく、求めて求め得られない懊悩の、その跡付けをする歌が多いのはそのためである。

2

さて一〇五番歌とそれに関わる一連の歌群を、「歌稿〔A〕」「歌稿〔B〕」ともに列挙してみる。それはこれらの歌群の特質についての解釈を進める上で、歌稿の形成過程（推移）・作品の成立過程を、あらかじめ明確にしておく必要があるからである。先にその一端に触れたが、「歌稿」〔A〕・〔B〕のその形成・成立について、以下詳らかにしておきたい。大きくは先ず「歌稿〔A〕」が妹達（トシとシゲ）と賢治によって、そして「歌稿〔B〕」が賢治自身によって編まれている。またその後も「歌

稿」〔A〕・〔B〕ともに賢治によって推敲されたり改作されたり付け加えられたりと、いくどもの手が加えられているものである。^{注2)}その歌稿形成過程の中で注目されることの一つは、「歌稿〔A〕」にあって「歌稿〔B〕」に入れられなかった歌が多くあるということであり、ここで取り上げた一〇五番歌を含む前後の一連の歌群は、特にその点が著しく留意すべきである。

「歌稿〔A〕」の九八番歌から一一〇番歌は、「病院の歌 以下」と言う詞書があつて、以下、次のように掲出されている。

98 熱去りてわれはふたゝび生れたり光まばゆき朝の病室

99 〔破棄〕

100 〔破棄〕

101 〔破棄〕

102 〔破棄〕

103 〔破棄〕

104 〔破棄〕

105 つゝましく午食の鯛を装へるはたしかにへびの青き皮なり

106 わが小き詩となり消えよなつかしきされどかなしきまぼろ

しの紅

107 かなしみよわが小き詩にうつり行けなにか心に力おぼゆる

108 めをつぶりチブスの菌と戦へるわがけなげなる細胞をおも

ふ

109 今日もまたこの青白き沈黙のなかにひたりてひとりなやめ
り

110 さかなの腹のごとく青白く波うつ細腕は赤酒を塗ればよろ
しかるらん
(以上、全て最終形態)

まず気がつくことは、一〇五番歌に先立つ九九〜一〇四番歌が〈破棄〉されていることである。何らかの形跡があるけれども破棄されたということだろうが、新校本「校異」では、この一連の短歌群の破棄にいたる経緯について、次のように推測している。

この六首分の紙片は破棄されている。その破棄はいつ行なわれたかはわからないが、「歌稿〔B〕」を自筆浄書する折にこの六首が除かれているのを見ると、浄書前または浄書時と考えられよう。なお、「歌稿〔A〕」には破棄部分の綴じ代が残っているから、「歌稿〔A〕」を賢治が綴じて後の破棄である。^{注(3)}

破棄したことの理由や意味を知ることとはともかく、どのような歌がそこにあったかを考えることは、以下の点で無駄ではない。その全体が見えなくても、あるいは具体的な内容が分からなくても、それは書かれた内容がいかなるものであったかを、可能な限り推測することが有意義であるからである。(この点についての、さらなる稿者の考えは後述)

この「校異」によって分かることは、九九〜一〇四番歌を破棄したのは、「歌稿〔B〕」の浄書前か浄書時、さらに絞り込んで「歌稿〔A〕」を賢治が綴じて後の破棄であったということになる。もう少し分かりやすく言えば、「歌稿〔A〕」にあった九九〜一〇四番歌を、「歌稿〔B〕」を編むときに掲出せず、また一旦「歌稿〔A〕」に綴じ込んでいたそれを、後になってから破棄したということである。すでに触れたが「歌稿〔A〕」の浄書の経緯を、「校異」に従って詳細に辿れば、妹トシが本文第一葉から第四〇葉(六四五番歌)まで、シゲが第四一葉から第四三葉(六七二番歌の途中)まで、それ以降は賢治ということになる。

ということは、問題としてある九九〜一〇四番歌をトシが浄書した時は、歌そのものは存在していたということになる。また破棄とは別に、これも校本収録が歌番号のみで「削除」「判読

不能」(一三五―一三九番歌)として扱われているものもある。^{注(4)} 不用意な言及は控えるが、不都合があったり掲出するに及ばないとの判断が、そこにはあったからであろうが、様々な憶測・推測を惹起する歌(群)ではある。判読不能の歌の内容はどのようなものであったのか、当然初恋と関わることで興味深い、ここではひとまずおいて先を続ける。

「歌稿〔B〕」は賢治の自筆によるもので、「歌稿〔A〕」をもとにそれを整理ししかも一部を除き、その短歌の大半は行分け(分ち書き)に書き改められている。^{注(5)} そこで特筆すべきは、九九―一〇四番歌のみならず、一〇六―一〇九番歌も掲出されず除外され、一〇五と一一〇番歌を残していること、つまり二首が並列した形で掲出されているということである。

3

先ず「歌稿〔A〕」から検討してみたい。「歌稿〔A〕」は賢治の短歌にかかわる全ての始源を収めたものと言っているものであり、たとえ歌そのものがなくともそれと認められる形跡―当初はあったであろうもの―があれば、校本では歌番号を立てているのである。とすればそのないもの、空白の歌(群)を読む

ことは、歌として成立している歌(群)の不透明な部分を補うものとして、憶測しさらに推測することは許されると考える。むしろその作業が、辻褃合わせや穴埋めに終始する懸念はある。がしかし、本稿で取り上げる不可解な歌(群)の解明は、その懸念を恐れては進められないし、何より賢治が歌としてそうした形で痕跡を残していることへの解答にはならない。

この欠落した歌群が伝えるものは何か。前稿でも少し触れたが、そこには掲出した歌(群)以上に、恋する者に対して求めて求めえられない衝動や、そしてそれに対する求める者の内部に惹起する、懊惱・相剋・憤怒・焦燥といった、激しい揺動・葛藤を内包する歌(群)があったと推測されるのである。

さてこれが「歌稿〔B〕」ではどうなっているかと言えば、九七番歌「よろめきて／汽車をくだれば／たそがれの小砂利は雨に光りけるかな。」の後、九八から一〇四までは歌番号もなく短歌もなく、いきなり、

105 つつましく

午食ごしょくの鯛をよそへるは

たしかに蛇の青き皮なり。

* 注(6)

青じろくなみうつほそうでは

赤酒を塗るがよろしかるらん。

と、二首が並んで掲出されていて、以下一一一番歌と続いている。

つまり、「歌稿〔A〕」にはあつた一〇六―一〇九番歌までの四首も「歌稿〔B〕」には掲出されなかつた。これについては少し前稿でも触れたが、あらためて四首がどのような歌であつたのかその内容を見てみると、一旦退院の目途がたつて訣別を告げる一〇六、一〇七番歌「わが小き詩となり消えよ……」「かなしみよわが小き詩にうつり行け……」であり、またその原因不明の病熱に苦しみ、不眠症に悩んだ原因が実はチブス感染にあつたことを告げる一〇八番歌「目をつぶりチブスの菌と戦へる……」であり、そうした状況下にあつて進退きわまつた沈潜した心境を伝える一〇九番歌「今日もまたこの青白き沈黙のなかにひたりてひとりなやめり」である。

しかしそれらは必ずしも一〇五番歌と一一〇番歌を直接結び付ける短歌とは言いがたいこともあつて、「歌稿〔A〕」にあつて二首はことさら結びつけて解釈するというより、それぞれが

独立した歌として読めるのである。

ところが「歌稿〔B〕」の場合は、一〇五番歌と一一〇番歌を並べて掲げられていることから、自ずから二首は併読し関連づけて読むことを印象づける。つまり、「歌稿〔A〕」のように一〇五から一一〇の歌群の中の、それぞれとして単独で読む場合と違い、二首を比較し関連づけて読む場合とでは、自ずからその歌意が変わることを暗示しているのである。と言うのは、推敲によって偶然そうなつたというより、そこに賢治の意図的演出を稿者は見るからである。つまり一〇六―一〇九の歌群は、それが歌として「歌稿〔B〕」に掲出するに相応しくないと判断したのではなく、一〇五と一一〇番歌を並列し掲出するため、それらの歌群は除かれたのだと稿者は考えるのである。そうしたことを念頭におきながら、この二首、特に一〇五番歌の解釈の可能性を探ってみたいと思う。

4

さて「歌稿〔B〕」の一〇五番歌を読むと、若干の解釈の無理（ごり押し）を除けば、少なくともこの短歌は二つのイメージを持ち、当然ながら全く異なる二つの解釈が成立するように思

われる。なぜそうなるかを仔細に考えてみると、それは「よそへる」(装う)という言葉そのものの持つ、多犠牲ゆえであると
言うことが分かる。それというのも「よそへる(装へる)」には
三つの語義があり、広辞苑には、

- (1) したくをする。取りそろえて準備する。
- (2) つくろう。飾る。
- (3) 飲食物を整えて、用意する。飲食物をすくって器に盛る。

とある。その内一〇五番歌を解釈する上で、自然な読みが成立するのに対応するのは(2)と(3)である。(1)も確かに(3)と重なるのであるが、ここでは解釈上(3)のように意味をより絞り込んだほうが、この一首の解釈では無理がないという意味で、それを除く。

まず(2)をもとに解釈してみよう。ここで「つつましく」が修饰しているのは、当然「よそへる(装へる)」であり、言ってみれば「慎ましく装飾している」と言うことになる。さらに何を装飾しているかと言えば、午食(昼餉)に出されたおかずである「鱈」(の表皮)である。つまり慎ましくも昼餉に出された鱈

の表皮を装飾している、と言うことになる。そして「よそへる(装飾している)」がかかるのは、「蛇の青き皮」であり、さらに言えば鱈と表皮のつながりがそうであったように、その皮の模様とするのが自然と言うことになる。

つまり「つつましく」と「よそへる」の関係は、ややその結びつきに無理があるが、皮肉なものの方とすれば成立しなくもない。その見方を前提に、分かりやすく歌全体を解釈すれば、昼餉に出された鱈をじっと見ていたら、慎ましくその表皮を装飾しているのは、確かに「蛇の青き皮」のようなあの模様(装飾)である

ということになる。以上のことを通して解釈すれば、

〔歌意〕慎ましく、昼餉のおかずである鱈の表皮を装飾しているのは、あの青みを帯びた 蛇の皮の模様である。

ところが(3)をもとに考えると、「つつましく」「よそへる」の「よそへる」は、昼餉のおかずを皿に盛りつけ準備をする者(賢治の初恋の相手である看護婦と稿者は見る)の動作ということになる。つまり、慎ましく昼餉のおかずの鱈を皿によそへる(盛りつけている)者は、と言うことになる。しかしそれだけ

では、解釈は成立しない。何故ならそのままでは、「おかずを皿に盛りつけている者」が修飾するのは、「たしかに蛇の青き皮なり」となるからである。ところが言葉をさらに付け加えて、「よそへるは」をよそへる（おかずを皿に盛りつけている）者のその細腕は、としたらどうであろう。すると解釈は成立するのである。しかもその細腕をさらに細腕の皮膚とすることで、不気味な感じはひとまずおくとして、一首の解釈はほぼ完璧に成立するのである。

〔歌意〕 慎ましく昼餉の（おかずの）鰯を、（皿に）よそっている（盛りつけている）者のその細腕の皮膚は、（たしかによく見るとあの）蛇の青い皮（の模様）である。

ここで言う蛇の皮に譬えられた細腕の皮膚の模様とは、人の肌に見れる斑紋である。露出した腕の体温と周囲の空気の温度差が大きい時に、しばしば皮膚の表面に浮き出るあの模様である。そうした視点で解釈して見れば、昼餉のおかずをよそっている（盛りつけている）人の腕を、瞬時に捉えた歌と言うことにもなる。

またこの(3)で成立する解釈は、後の一一〇番歌「さかなの腹

のごとく／青じろくなみうつほそうでは／赤酒を塗るがよろしかるらん。」と併読することによって、よりそれが確かなものとなるのである。その事実を明確に示そうとしたのが、「歌稿〔B〕」での並べての掲出である。すでに掲出しているが再度引用すれば、

105 つつましく

ごじやく 午食の鰯をよそへるは

たしかに蛇の青き皮なり。

*

110 さかなの腹のごとく

青じろくなみうつほそうでは

赤酒を塗るがよろしかるらん。

となっている。一一〇番歌の歌意は、魚の腹のように、皮膚が青白く波うつっている細腕だが、健康に見えるように、赤酒を塗ったらしい、となる。この歌の主体は細腕の主ではなく、細腕の主（恋する人）に呼びかける・モノローグの主である。つまり細腕の主に向かって、あなたのはまるで「さかなの腹」のように青白く不健康で痛々しいので、赤酒を塗って健康に見え

るようにしたらいいだろう、と呼びかけているのである。

そこで気付くことは①一つの見方として、一〇五の主体が昼餉のおかずである鰯の表皮であり、それが蛇の皮の模様に似ていると読めるけれども、一一〇番歌を併読し比較する視点を導入すると、②もう一つの見方である、昼餉のおかず(鰯)をよそう(皿に盛りつける)人間を主体とした読みの方が、より妥当に思われるのである。要点をまとめれば、一〇五番歌においては、おかずを盛りつける人の細腕の皮膚は、まるであの蛇の青い皮のような模様である、となり、一一〇番歌では、魚の腹のような青白く不健康な細腕の皮膚には、となる。

そしてその二首が並べて掲出した意味(意図的演出)は、併読し関連付けて解釈するということであり、そうすることで二首に共通する、イメージの連鎖がそこに生まれるということである。もう少し分かりやすく二首のイメージの連鎖を説明すれば、鰯の表皮が蛇の青い皮に重なり、蛇の青い皮が細腕の皮膚に重なり、細腕の皮膚が鰯の表皮に重なるという風に、イメージが循環するのである。

恋する人の腕の皮膚の斑紋と、蛇の皮を結びつけるあるいは鰯の表皮に結びつける驚きは、その人の腕に対する限りない関心が、そして恋するその人自身に対する執着というものが、そ

うした至近距離からのトリビアルに見えてなおざりにできない視点を留意し、ディテールに透徹し異形化したイメージとして定着させていることである。いうまでなくあるものを何かに譬えることは、それほど驚くことではない。しかし蛇の皮の模様をその人の腕に見いだすその透徹した観察力・洞察力は、美・醜の対峙を越えて読む者に迫るものがある。また「歌稿〔B〕」において、ついに届くことはなかったにしても、「赤酒を塗るがよろし」と呼びかけるモノローグのユーモラスな物言いは、その模様の持つ細腕の主(存在)への、限らないほのぼのとした思いの深さというものを感じてならない。それは恋する人間の持つ多面性の一端の提示と見るべきであろう。

おわりに

一旦一〇五番歌と一一〇番歌が並べられ、「歌稿〔B〕」上に成立したことは明確であるが、しかし、その二首の成立を否定するように後の手入れで賢治は、一一〇番歌に「斜線」を付し抹消しているのである。^{注)}この「歌稿〔B〕」に二首を並べて掲出することの段階から、一一〇番歌を削除し最終的に単独の一首一〇五番歌だけにした意味は何なのか。大いに興味深いこと

だが、その稿は別に改めるとする。

ともあれ恋する人を恋するままに歌うだけでなく、その人の持つ属性や特質までも、くもりなくリアルに捉えようとする姿勢を、偽りなく賢治はみせている。そこでは美も醜も、観念も実体も、そして虚も実も区別なく描くということになる。そうしたものの一端が、初恋をめぐる賢治の短歌の背後には、絶えず見え隠れすることも確かである。

注(1) 「宮沢賢治の初恋と創作―短歌・文語詩を中心に―」(安

川定男先生古希記念論文集編集委員会編『近代日本文学の諸相』平成二年三月、明治書院刊所収↓後、拙著『宮沢賢治とその周縁』平成三年六月、双文社出版刊に再録)

注(2) 新校本全集第一巻「校異篇」の「歌稿〔A〕」(5〜7頁)、「歌稿〔B〕」(23〜24頁)、「『歌稿〔A〕』『歌稿〔B〕』に関する補説」(71〜72頁)参照。

注(3) 同前全集同巻「校異篇」の「歌稿〔A〕」(9頁下段)参照。

注(4) 同前全集同巻「本文篇」の「歌稿〔A〕」(22頁)、ならびに「校異篇」の「歌稿〔A〕」(10頁下段)参照。

注(5) 行分け(分ち書き)短歌は、いうまでなく石川啄木の影

響である。それに短歌に目覚めたのも、その『一握の砂』

(明治43・12)を手にしてからである。ちなみに啄木の行分けは三行に統一されているが、賢治のそれは二から六行と多様である。

注(6) *印は各首の間にある。同前全集同巻「校異篇」の「歌稿〔B〕」(23頁下段)参照。

注(7) 同前全集同巻「本文篇」の「凡例 十三」と、本文(123頁)参照。

(いけがわ けいし／大阪教育大学)